

# 電気機器・精密機器メーカーの経営効率性分析 —包絡分析法を用いて—

村木 英 登

## 目 次

- |   |           |
|---|-----------|
| 1. はじめに—問題意識と本稿の目的—                           | 5. 分析プロセス |
| 2. 対象企業（51社）の範囲について                           | 6. 分析結果   |
| 3. 財務分析の利便性と限界                                | 7. 総括     |
| 4. 包絡分析法(Data Envelopment Analysis:DEA)の提唱と展開 |           |

1980年代に世界をリードしてきた日本の半導体産業の中で、2000年以降、電気機器・精密機器メーカーでは、市場の飽和状態や海外企業の参入が相次ぎ、売上高は伸びず、企業として成長できない状況が続く。そうした状況下で、現在、各企業は効率性を重視していると思われる。本稿では、経営効率性を測定する統計手法として主張されている包絡的分析法を用いて電気機器・精密機器メーカー業界分析を行い、知見を得ることを目的とする。

## 1. はじめに—問題意識と本稿の目的—

1980年代の日本の産業は、半導体、鉄鋼、自動車世界をリードする存在であったと言われていたが、現在は低迷しており、これは日本の産業における課題であると考えられる。特に半導体産業の中でも電気機器・精密機器メーカーにおいては、市場の飽和状態や海外企業の参入が続き、価格競争が続いている。

図表1、図表2は法人企業統計(注1)に基づく電気機械製造企業の業績である。傾向としては、売上高および資産合計は減少する一方で、営業利

益率とROAは増加傾向である。

言い換えると、2000年度以降の電気機械製造企業の傾向は、市場のシュリンクもあって売上高が減少する中、事業の売却やリストラを繰り返し、効率性を重視するような経営を行ってきたと推測できる。

このような背景を踏まえ、企業として効率性を重視することは、事業を継続するためには有意義な手段であると考えられる。

そこで本稿の目的としては、近年の電気機器・精密機器メーカーの財務データをベースに、経営効率性を分析することである。



村木 英登 (むらき ひでと)

1999年3月慶應義塾大学経済学部経済学科卒業。同年4月大手民間企業に入社後、営業・経営管理・CSR業務に従事。2018年3月産業能率大学大学院総合マネジメント研究科総合マネジメント専攻経営管理コース修了、2019年4月より明治学院大学大学院経済学研究科経営学専攻博士後期課程に在学中。